

## 資料組織教授法の変遷

— アメリカの図書館学校を中心として —

### On Teaching of Organization of Materials for Use

中村初雄

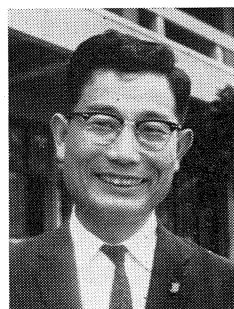
*Hatsuo Nakamura*

#### *Résumé*

The Sub-committee for Public Librarianship, Committee on the Training for Librarianship of Japan Library Association recently made a proposal which recommended to offer eight units to the technical processing courses out of the total forty units which were considered by the Sub-committee to be the minimum for the future professional public librarians as their major study requirements.

The problem of how much emphasis has to be put on the technical processes in the curriculum of education for librarianship urges us to pay attention both to the nature of technique employed in the library and to the means to prepare students for actual library work. Being stimulated by a veteran librarian who criticized the above proposed plan because of its putting too much emphasis on the technical processing, the writer tried first, to clarify the concept of technique and technical education for librarianship, second, to make retrospective search in the history of courses offered in this respect together with problems involved in it, and third, to examine historical outlook of the technical courses in American library schools.

It is of utmost importance to see what is really required by libraries and librarians at work on the content of courses provided for technical processes and to try to make courses applicable to existing demands. At the same time, however, we have to recognize the fact that both the nature of libraries or information centers and the demand of users do change. To meet the situation, we can't be satisfied only by fulfilling the demands unless the demands are analyzed and utilized, supported by theoretical basis, to grasp the true picture of technical services in the library in view of all related elements.



#### 序論

- I. 史的回顧と問題点の指摘
  - II. アメリカの図書館学校
  - III. 資料組織教授法の変遷
- むすび

#### 序論

##### A. はじめに

図書館雑誌第59巻第3号(1965年3月)に、図書館学教育改善委員会第二次中間報告として、公共図書館小委員会が必修科目32単位、選択科目18単位(このうちより8

中村初雄：慶応義塾大学文学部図書館学科. Hatsuo Nakamura, Professor, Japan Library School, Keio University.

単位以上を履習)の科目名を発売したときのことである。修士号を有し、司書、教員、学芸員資格をも有する公共図書館のヴェテランから、手厳しい批判を受けたことがある。その意見の中には「とにかく現在の講習制度は早急に全廃してほしい」という正論ばかりではなく、私共、技術面の教育に従事しているものとして見のがすことの出来ない見解を含んでいるように思った。そしてその見解が、その修士司書の方一人の偏見でもなく、相当数の司書の間にも蔓延していることがわかったので、標題の如きテーマを選び、現代における技術面、断わるまでもなく図書館技術の持つ意義について考察を加えてみることにした。

前述の第二次中間報告では、必修科目の中に資料分類論(4単位)、資料目録論(4単位)があげられていたが、批評者は次の様に言っている。

公共図書館の目的と使命は、地域社会の住民への読書サービスとし、市民文化の向上をはかることにあると思うが、この案によると、図書館技術面に重点がおかれ、肝心の地域社会の研究法・理解法・社会教育といったものが忘れられているのではなからうか。筆者は、「図書館社会学」という学問が成り立つと思うし、今後は非開発されるべき分野と思う。

ここで「図書館社会学」といっているのが Karstedt<sup>1)</sup>のそれを想起して言っているのか、それとも「社会と図書館」「社会教育機関としての図書館」「図書館学概論」として触れられているものをモット展開させるように主張しておられるのかは、ここでは問わないことにする。私が問題にしたいのは、我々の同僚が「図書館技術面に重点がおかれすぎている」というのは何を一般に意味しているかを明かにしてゆくことである。

大学の課程、一つの専門課程の中でどの程度の重点(科目)の配分が適当とみなされているのか?

図書館技術面とは主として何を指しているのか?

それらはどのような条件下で、どのような方法で履習するのが効果的であるか?

以上の諸質問に対し、いささかなりとも参考になり得るデータを見出すことが出来れば幸と思う。

## B. 技術と技術教育

技術という言葉は必ずしも、一義的に理解されていない。各分野、各人によってそれぞれニュアンスを異に解されている言葉の一つである。「わざ」、技巧、技芸と同

義と説明されたり、「科学を実地に応用して、自然の事物を改変、加工し、人間生活に利用するわざ」と定義されたりしている。しかしながら科学と常識、理論と実際の境界がつけにくくなってきた現代——そしてその傾向は、資料生産の激増と学問対象の特殊化・分化が進んできた今日では益々顕著になっていく——その境界は一般的には容易に把握出来ないものとなってきている。英国では、応用される方の科学の程度・レベルによって、このギリシャ語源の *techne* という語を *technical* と *technological* とに使いわける傾向がある。更に前述の定義の最後の「人間生活に利用するわざ」という表現中利用という言葉は、直接目で明らかにされる効果と結びつけてのみ考えるべきか、それともまた間接的に利用するものを含めてよいのか等種々の問題も生じる。理論と実際、自然と人工、芸術と実用といったものの間に画然とした二分法(Dichotomy)が出来るのは観念上のみであることを知らなければ理解できない。知識と技術を対比させて、二分法でわけようとする場合も同様である。そのものを求める動機は、知識そのものであってよいというのと、何らかの目的をもってそれを達成するためという差違がある、という観念上の区別は出来るが、個々の事柄について、「これは知識」「これは技術」という具合に識別していけるものときめてかかることは危険である。各人がそれぞれ自分の経験から割りきって、納得のいくようないくつかの典型的な例を挙げていくことは可能であろう。しかしながらそれもいくらかも挙げていくうちに、約2割の人は「果してこの区分でよいだろうか?」と疑問をおこすようになろう。そのまた一部の人は、「反対の区分に入れるべきである。」と主張するかもしれない。我々が今日図書館学で問題にしていることは、絶対的のものではなく、統計的の「確からしさ」を追求していくことが主である。分類法、目録記入の規則、目録編成の規則、皆然りである。これらの約束・規則が、それが出来た当初に設定されていた意図を効果的に果しているかどうかを観察・測定・考察していくのが専門職司書の責任の一つである。また社会全体の変化、資料の世界、利用者側の要求の変化にも対処していくための参考データを作ることも司書の任務の一つである。しかしながら司書が図書館に於て行う第一の任務というのは、いうまでもなく、それぞれ図書館で採用決定した規則を応用・運用していくことである。具体的にいって、分類係、目録係の司書の場合は、規則に従って、資料の配架位置をきめたり、資料検索のための効果的な道具として

の目録を準備することである。

これらの機能を専門職司書が効果的に果していくためには、当然「技術教育」というものが前提となる。「技術教育」とは普通には「産業活動に必要な知識と技術の教育」と定義され「近代産業社会の発展と共に教育上重視されるようになった。」と説明されている。

*Encyclopaedia Britannica* (1963) では Harold Collett Dent は、「知識と技術」という言葉の代りに「科学と熟練」という表現を用い、「産業活動」というあまりにも漠然とした言葉の代りに「商売だとかその他の職業で必要とされる、特に機械の使用だとか、科学的装置の操作等も含めての実務に必要な」という表現を用いている。

技術教育を実施していくにあたり、二通りの基本型が考えられるのは周知のことである。第一の型は、当該技術に熟練することを主眼とするもので、反復練習訓練によって目的を達成するものであって、正規の学校などにおける講義を主とした学習では達成しにくいといわれているものである。第二の型は、その技術の基礎となる原則に関する知識を教育し、個々の場合にそれを応用していく判断力を養成しようとするものである。この方は、正規の学校における教育でも大いに効果があるとされている。

図書館学教育——この言葉を本論においては、専門職としての図書館員訓練・養成の意味に用いる——に対してどちらの技術教育の類型をとるべきかについては、アメリカにおいては、William Frederick Poole と Melvil Dewey の間に激しい論争が交されたことはあまりにも有名なことである。1887年には、Columbia 大学内にデューイによる図書館学校が設立されたわけであるが、これは何も両方の意見の討論が終結したと見るべきではなく、実施、実験によって永年の論争を実証しようとしたデューイの意図と見るべきであろう。

正規の学校で技術教育をとりあげた場合、技術だけを教えることは意味がないのは自明である。根底になる知識なり学問を組合せて教育しなければ、効果は期し得ないのである。このことは高等教育程度以下の技術学校においても言い得ることである。いわんや専門職員を養成しようとする大学における技術教育においては然りである。実務的訓練に近いやり方は、技術教育を実施する学校のレベルが低い程、時間的にいって多量に配当されているのが常であるが、たとえ大学、大学院程度の教育機関においても実務的訓練を無視することは出来ない。<sup>2)</sup>

### C. 技術教育としての図書館学教育

さきに紹介した Dent による定義に従えば、図書館は専門職を必要とし、そこで用いられる装置の操作等も含めての実務に必要な科学と熟練の教育という限りに於いて、図書館学教育は明かに技術教育である。はじめに引用した或るベテランの批判で「図書館技術面に重点がおかれ…」という場合の「技術面」とは「知識とか科学でなくて、熟練を要するわざ」に関して言っているのである。英国での最近の用法に従った場合の technological でない方の “technical” を意味し、アメリカの目録者達が用いる “technicalities” などを想起させる言葉である。目録法とは、図書館における所蔵資料を探索、検索する道具を作成していく手段であるから、明かに技術であろう。その技術が機械的なものか、それとも判断を加えながら行わなければならない技術であるかについては、それぞれの場合について検討してみなければならない。分類法についても同様のことが言い得る。資料そのものの配列に体系・秩序を与えることにより検索を便にし、資料の代用品ともいべきカードなり記入に順序・体系をつけて検索用具を作ってゆく技術である。

図書館における諸業務に関連しての技術にはまだ他にもいろいろとある。しかしながら目録と分類とは古来から最も基本的なものとされてきたものである。これらがいかように教えられてきたか、その変遷をみていくことにする。

### I. 史的回顧と問題点の指摘

フランスの École des chartes (国立文書学校1821年創立) オーストリーの Institut für Österreichische Geschichtsforschung (史学研究学校1854年創立) ドイツの Göttingen 大学の Dziatzko の講座(1886) はより古い創立といえるかもしれないが、技術教育という意味での要素は比較的稀薄であるので、ここでは米国を例にとり、その問題点を明らかにしてゆくことを試みる。

#### A. 概観

米国における、制度的(正規の)教育機関が出来てからの、技術的奉仕の訓練は次のように概観することが出来る。

創始期 1887-1920 年代

諸規則設定時代(カッターの目録規則は1876と1889、デューイの十進分類法は1876と1885、アメリカ

## 資料組織教授法の変遷

カ図書館協会件名標目表1895, 議会図書館件名標目表1911, シアーズ件名標目表1923)。それまでよく用いられていた分類目録を捨てて辞書体目録が使われるようになった。図書館学校は技術的奉仕, 処理に精通した人を訓練するのを目標とした。

発達期 1920年代後半より1940年代

図書館学校で使えるような教科書, 未訓練の図書館勤務者が自学に使えるような手引きと教科書をかねた図書の出現。(前者の例は Mann の著作, 後者の例は Akers の著作で代表されよう。)

各図書館学校で使用するための教材・要綱, カード見本等の発行。この期間に印刷カードも普及し, 書誌参考資料が盛に出版されるようになった。これにともない利用者への奉仕が盛になった。

図書館の館種別がハッキリしてきて, 特別な資料, 特殊な状況が考慮されるようになった。

現代 1950-

図書館学校を完全な大学院コースとした。その影響は, コース内容そのものにはあまり変化を与えず, むしろ教授法, 宿題の種類と量に変化をもたらした。作業に慣熟するというよりも, むしろ批判的に考えていくことの必要が説かれるようになった。実習量は減少, 能率的運営が強調されてきた。方針・諸手続きの分析評価の出来る図書館人を訓練するのを目標とするようになった。

### B. その問題点

ここで図書館学校を完全な大学院コースとしたというのは, アメリカ図書館協会公認の図書館学校について言っているだけである。1962/63 の図書館学校名簿によると, 42 の公認図書館学校の他に, 235 の図書館学科目を持つ学校がある。実際には, この大部分は学校図書館での勤務を対象とした教員養成大学における副専攻としての図書館学コース(144校)である。またこの名簿の中には準専門職的な図書館員訓練のコースを実施している学校も44校登録してある。

このことは米国においても, 学部程度の図書館学科目が相当に広く与えられていることを示している。そこでは, 技術的奉仕に関するコースはどのように扱われているかに触れておこう。

米国南東部の図書館学教育関係者が 1961 年 10 月に University of Tennessee で行った研究会<sup>3)</sup>の結論と勧告を紹介しておこう。

時間数としてはたとえ大学学部程度のレベルで行う場合でも 2 学期制のところでは週 3 時間, 4 学期制(3 学期と夏学期)の場合では週 5 時間を最少限とするとしている。

あまり簡易化したコースにしてしまえば, 極端な小図書館にいく場合以外に役に立たない。またそれをすませたからとて, 大学院程度の図書館学校に入学する資格とはならない。時間の関係で不可能なら, むしろ, 図書館管理概論のコースにでも含ませて簡単に取り扱い, 別のレベル「即ち大学院課程」で本格的に「資料組織」の講義をとらせるべきである, としている。

次に示すところの「集書の組織」に関する教育内容はどれ一つをカットすることも許されず, その目的は低下・制限されるべきでない。

目的 集書を組織化しておき, 利用を便にしておくことの意義を教え, それを達成するための各種の技術を導入する。

- 効果的利用を可能ならしめるために必要な諸原則, 概念, 方法, 実務, 問題点の説明。
- この業務の図書館プログラムに於ける重要性を理解させ, 他の奉仕部門との関連をつける。
- 一般に使われている, 道具, 参考書, 方法などに慣れさせると同時に, それらの持つ応用の限界を認識させる。
- 図書館間協力の重要性が増大していくのを認識させる。
- 相当程度の実務を, 監督なしに遂行していく能力。

内容の概要

#### I 序論

##### 目的

記録された知識を調整, 組織しておくという, 図書館の役割

用語・参考文献

目録の機能・利用法・構成(作成)

#### II 記述目録

その原則, 逐次刊行物・非図書資料

カード・記入に記載すべき諸要素

印刷カードの使用

カード複製法

目録記入の規則

#### III 主題分析とコレクション

分類、基本原則と十進分類法

件名標目表と件名

IV 図書記号

V シェルフリスト

VI 目録作業全般の管理<sup>3)</sup>

この研究集会は Ruth Rockwood が指導者、Carlyle Frarey 等が参加して開かれたものであるが、そこでは、「たとえ大学学部程度にあってもこれだけのことは教えられなければならない」ということを主張しているわけであるが、更により高級な図書館学教育のプログラムが展開されていくのを願っているものであることは論をまたない。学部程度より更に進んだレベルに於ての教育が望ましい、否むしろ正当な図書館界の発展を望むならば、それは必須であるという意見は最近着々とその地歩を占めてきたと言えよう。その点については、小倉親雄氏の論文を引用して明かにしておく。氏はその網羅的調査研究「図書館学教育の諸類型」の末尾において次の如く述べておられる。

…マン (Ralph Munn) が、図書館現場から見た場合、図書館学教育は、当時一般に行われていた通り、大学院基準の1ヶ年課程で充分であり、それ以上の課程は之を必要としないし本当に必要なものとなれば、それは書誌的・技術的な部門のものではなくて、先づ何よりも、もっともっと優れた一般教育であり、無限に必要とされるものは、書物に関する知識と加うるに実務の体験であると主張し、図書館学校が、実務業務から余りにもかけ離れて行きつつあることに不満を表明したのに対して、こうした見解を批判し、「マンと対決した」とまで云われるカーノブスキー教授との間になされた論争は余りにも著名であるが、彼によるとマンは、現代に於ける図書館の実状を、「この最善の世界に於けるあらゆる可能なものの中では、最良のもの」と見做す結局は現状維持者であり、「新しい形態を実地に試みようとするのことに對しては、当然のこととしてその門を閉ざして終う人」であると語っている。<sup>4)</sup>

Bernard Berelson<sup>5)</sup> は彼がシカゴ大学図書館学校校長になった直後主宰した図書館会議 (1948年8月) で、次のように述べている。それは「図書館学における後期大学教育と研究」(Advanced study and research in librarianship) に関する発言であって、当時即ちさきに

概観した発達期の最後の段階にあたり、アメリカの図書館学教育界にあってシカゴ大学の図書館学校の立場が特に微妙な空気にあったのを反映して、慎重な言いまわしをしている。「公認されている図書館学校は40もあるが、私はその中で5校しか知らない。学生についていっても、私は上級・高級の学生だけ数十人についてしか語れない。自分自身の経験は図書館学校の学生として何年か、講師としての何ヶ月、校長としてはホンの何週間なのに、8月はきてしまった。」といった意味の頗る低姿勢のことわりをいった上で、Williamson, Reece, Munn, Wilson, Danton 達の見解とその功績を紹介し、こと大学院程度の履修や現場と直接には関係しない事がらについての研究が必要であるや否やは、もはや議論する余地のないことであり、いかにそれを効果的に実施してゆくかが問題であると主張している。

Munn and Carnovsky had fought that one out, and at least White and Danton and Metcalf-Russel-Osborn had got in a few punches lately.

小倉氏が Munn<sup>6)</sup> と Carnovsky<sup>7)</sup> との対決と言っておられるのは、次のことを指していることと思う。

Carnovsky はその論文の中で、「大学院課程の学問とは何ぞや?」ということも漠然とさせたまま、また図書館学の範囲もルーズに使ったままで、議論がかわさっているので混乱を一層ひどくしている、ということを指摘した上で、Munn の意見を批評している。

…Munn のとった態度に対する【私自身の】態度は、大学院における学習とは何ぞやの概念規定如何によると言えよう。Munn が多勢の実務家についてその意見を徴してくれたことは、いわば代弁してくれているようなものであるともいえよう。彼の言っていることは、いちいち、モットモなことである。[それをハッキリさせてくれたことを] 称賛したいのであるが、話は彼の場合、まだ一部に触れられたに過ぎないのだという感を持つのである。

Munn に対し公平に言えば、彼は学部終了後の第一年度のカリキュラムにあまりに重点をおきすぎているという点を指摘しておきたい。彼としては、当然のことであろうが、図書館の訓練とは職員の各員をそれぞれ特殊な業務にたえられるように準備【訓練】していくことであると解している。しかるが故に彼は、カ

## 資料組織教授法の変遷

リキュラムは既存の図書館での諸問題だとか諸業務にマッチするように展開していかねばならないと結論している。私はその結論は正しいと思う。彼が各種さまざまな図書館があること（従ってそれに相当して司書養成にもいろいろの型があること）を強調しているのは全く正しいことであり、充分に認めておく価値がある。

しかしながら、彼が後期訓練の性格を考える場合にまでも第一年度の訓練でとっていた態度を固守している。【のは適当でない】ここでも彼は特殊な業務にこだわりの、その当然の帰結として、「ピッツバーグ図書館程度の公共図書館では、館長とか、その他の5-6名の部長、専門家以外は、現在の一年課程の図書館学校で教えられている程度の書誌的訓練や整理関係の訓練以上は必要ない。」といったことを結論してしまうのである。「彼等はむしろ、一般教養だとか、モット遙かに図書の知識と経験を必要とするのだ」と主張するのである。

それ【図書の知識や経験がどこまででも得られる事を指す】がうまくいけば結構なことである。ところが残念ながら、そんなに具合よくはゆかない。誰でもこのことについて考えた人にはわかる様なところまではいくのであるが、それ以上は却々進まないということがある。Munnの言っていることは、若干の点で改善していく余地はあるが、本質的なところでは現在の図書館のやり方は、可能と考えられるものの中では最良のものと認めていく立場であって、ヴォルテールがDr. Panglossに言わせている立場と大差がないようである。<sup>9)</sup>

Carnovsky氏は更に、大学院での後期履修の場合には、訓練の場としてだけでなく、現在図書館界で行なわれている諸方法が果して所期の成果をあげているか否かを評価する場でもあると主張して、次の様にも述べている。

...完全にしようという動機から、カード（記入）を沢山出しておくということが反って仇になり、カード目録が尨大化し使いにくくなるということがないだろうか？ 端的に言って、完全は望むところであるが、それがもしも目録利用者側に混乱をおこしてしまうような場合には、【使いやすさという】効率の概念を検討する必要がないのか？ おそらくこのジレンマから

抜け出すためには、主題別書誌を印刷発行し、目録カードの数を減じていき、目録をその本来の姿——それは今日でも最も基本的な目的といえると思うが、図書館の内容【蔵書】の案内ということ——にマッチさせていくより外ないと思う。勿論このような決心はそう簡単に達せられるものではない。安易にこんな風に考えるのは避けなければならない。主観的な論理だけに基いて、この結論を出すのは不可で、客観的な経験から割り出して到達させるべきである。「目録が完全であればある程、記入やカードの種類とか数が多ければ多い程、どんな場合にでも良いものになっていく。」といった仮定は真剣に検討されねばならぬ問題である。<sup>9)</sup>

## II. アメリカの図書館学校

以上あまり最初から問題点をとりあげてしまったが、これらの問題点の理解を容易ならしめるために、いくつかの歴史的経験を紹介しておこう。

### A. デューイの図書館学校（コロンビア大学）

見習い実習こそ唯一の技術修得の途であると考えていた先輩 Poole の強い意見にもかかわらず、アメリカ図書館協会の書記長ともいべきデューイが、正規の学校、しかもその中でも伝統を尊ぶことで有名であったコロンビア大学に最初の図書館学校を設立したのは大きな意味があった。Kings College として知られていたこの大学がアメリカ独立以後コロンビア大学とはなったが、「実用的なものを大学内にもち込む」ということに対する抵抗は他学部教授達の間には相当に根づよいものがあったと言われている。<sup>10) 11)</sup>

たとえ2年しか続かなかったにせよ、デューイがこの大学に、最初の図書館学校を設立出来たのは、彼のねばり強いしかも緻密な計画性と彼を信頼した Barnard 総長の理解によることは勿論であるが、アメリカ教育局の出版物 *Public libraries in the United States of America; their history, condition and management. Special report.* (Washington, U.S. Gov't. Printing Office, 1876) と *Statistics of public libraries in the United States.* (Washington, U.S. Gov't. Printing Office, 1886) が全図書館界に普及していたことも大きな要素であったと言わねばならない。即ちこれらの出版物を通して、アメリカ公共図書館界全体が要求している専門職図書館員の数が如何に大きなものであるか、また個々の公共図書館で見習い実習をやっていくのが如何に

大きな無駄であるかがよくわかっていたからである。

その当時の教育目標というものは、明らかに、公共図書館司書の養成にあったといえよう。結果としては、デューイの初期の教え子達はむしろ公共図書館以外にしているが、設立の機運は公共図書館側の要求、一般の図書館司書を養成することの必要から生れてきたといえよう。そしてそれはまた、「いかなる館種に職場を得ようとも、これだけは最少限知っていなければ」という最少限を核心 (core) とするような教科編成でもあったことの説明ともみられよう。ここでは当時の科目配分について若干の紹介を試みよう。

初年度の Dewey 学校の 20 名の学生 (男子 3, 女子 17; 全米から 19, 英国より 1 名) に対しては、デューイ主任教授以下 6 名の教員と 1 人の主任教授事務補佐があたっていた。主題の配分はあまり判然とはわけられていないが、Biscoe 講師は目録と分類を、Baker 講師は書誌を、Hutchins 助手は、辞書体目録を担当していた。<sup>12)</sup>

第 2 年度即ち 1887/88 年度には 7 名の教員が、260 回の講義並びに指導を行っている。その他に 22 名の図書館界の指導者、7 名の図書館界以外の専門家が 67 回の講演を行っている。更にコロンビア大学の他学部・他学科の教授による書籍解題の講義は 27 回行われている。<sup>13)</sup> 学生数は最初は 10 名を採用する方針であったところ、100 名近くの志願者があったので次第々々に増していき、結局 22 名を採用した。それに、前年度の 20 名中 11 名は 2 学年生として残ることになったわけである。クラスの行事として 19 の図書館の見学を行っている。

当時の所謂「実務的」なる授業なるものは何が主であったかという点、目録記入(分出調製を含む)、図書資料分類もさることながら、受入原簿への登録、図書館書体の練習が主であったと言われている。早く、きれいに型にはまった円い字を書くことの訓練であったという。タイプライターが商品化したのは 1867 年で、Remington 商会で 1874 年に売られた商品は、大文字だけであった。キーソフトをつけ小文字が打てるようになったのは 1878 年になってはじめてであると聞けばその事情もうなづけよう。勿論その当時でもセミナーも行い、今日も問題とされている、「館長及び館員資格論」「如何にして図書館について興味を増進すべきや」といったことも大いに討議はされていたようである。しかし非常に多くの時間が、目録分類を中心としての技術訓練のためにむけられていたことは想像に難くない。

#### B. 初期の図書館学校における時間配当

コロンビア大学におけるデューイの図書館学校が 2 年後に閉校になったのか、それともまたニューヨーク州立図書館に移管になったかについての論議、またその直後の Albany に於けるデューイの図書館学校の状況は、技術の訓練、慣熟というものにあまりにも重点をおきすぎたということに対する、批判というものと切り離して解釈することは出来ない。しかしそれには上述の Trautman および Vann<sup>15)</sup> の労作があり、またこの小稿の範囲ではよくつくすところではないので、ここには Vann の報告の一部を引用することによって、論題を進める。

1889 年に Albany のニューヨーク州立図書館へ持っていかれたデューイの図書館学校と、その直後創立された 3 つの図書館学校では、19 世紀の最後の年に、いかなる時間配分で、目録・分類の科目をあつかっていたかを見ることにしよう。

Brooklyn 公共図書館附属 Pratt 学校は 1890 年、Philadelphia の Drexel 工科大学の図書館学校は 1892 年、シカゴの Armour 工科大学の図書館学校は 1893 年に、創立されている。最後のアーマー図書館学校は 4 年後即ち 1897 年 9 月からは Illinois 州立大学の図書館学校となっている。

	Albany	Pratt	Drexel	Illinois
	%	%	%	%
目録	540(35.5)	230(15.4)	560(40.0)	312(19.3)
分類	93( 6.2)	106( 7.0)	40( 2.9)	116( 7.2)
製本 修理等	80( 5.3)	12( 0.8)	16( 1.1)	24( 1.5)
その他	807(53.0)	1152(76.8)	784(56.0)	1168(72.0)
計	1520	1500	1400	1620

上表<sup>15)</sup> からみられることは、前世紀の末において、図書館学校で課せられていた、所謂技術教育の技術部門に一番関係の深いとみられていた、目録・分類の配当時間は全体の四分の一乃至半分であったという事実である。

#### C. 19 世紀から 20 世紀へ (最初の図書館学審査基準まで)

Vann<sup>16)</sup> によると、19 世紀から新しい世紀に受けつがれた、図書館学校教育の努力目標ともいべき点は、次の 3 点であると言われている。

1. 図書館学校は総合大学に設置せられるようにすべきである。

資料組織教授法の変遷

2. 図書館学校入学資格は、大学学部卒業程度にすべきである。<sup>17)</sup>
3. 図書館学教育の審査機関を確立すべきである。

この3点のいずれをも、直接・間接に関連して取りあげているアメリカ図書館協会の図書館学訓練委員会(1903年図書館学校関係者のみ6名で構成、1906年には改選して図書館界の館種別代表者4、図書館学校卒業者での現職者4、計8名で構成。但し委員長は両期を通じPratt Instituteの図書館学校長のMary Wright Plummer)の報告から紹介しておこう。

1903年の報告によると、当時の9図書館学校の入学資格は次のように規定してあった。

- New York State Library School 大学の学位  
(1902 Mar. 1- )
- University of Illinois 大学3年修了(1902 Dec. 9- )
- Chicago University 大学2年修了(但し2年以上前は無効)
- Carnegie Training School 試験(但し大学免状所持者は免除)
- Pratt Institute 試験
- Drexel Institute 試験
- Simmons College [未報告; 高校卒またはそれに代るもの]
- Syracuse University 高校免状または高校長による推薦
- Columbian University<sup>18)</sup> 健全な知性

ここで「健全な知性」というのは“good intelligence”の訳であるが、どうしてこれを測定するかについては触れていない。

参考のために、これらの図書館学校が、実習をどう考え、あつかっていたかを見よう。

- New York State Library School  
第1年度90時間 第2年度200時間
- University of Illinois  
第1年度260時間 第2年度330時間
- Pratt Institute  
第1年度468時間 第2年度132時間
- Drexel Institute  
第1年度 60時間 第2年度180時間

Chicago University [現在の図書館学校と異なる]

大学図書館で見学実習2年間

Simmons College

図書館学校に依頼された大学図書館で実習。但し見学実習は他の図書館で可

Columbian University

目録作業をする機会を与える

Syracuse University

第1年度週6時間 第2年度週25時間

Carnegie Training School

学年の半分は実習にあてる。<sup>19)</sup>

これらのデータの中には、一、二それだけでは計量化出来ない回答も含んでいるが、前述1900年の表と較べてみる場合、我々に非常に重要な示唆を与えてくれるのである。<sup>20)</sup> 即ち当時のアメリカの図書館学教育で、「技術偏重」という声が生れてきた時の状況は、日本の現状とは相当の開きを持つことを認識して討議していかねばならぬということである。しかもその当時の「図書館学訓練委員会」はこれらの調査をもとに如何なる批評を下しているかをみてもみよう。

Vann は「9校の調査をした結果、3校に対して批判を加えている。シカゴ大学は入学条件が低すぎ、また科目の一部分だけ取ってもよいことになっているのは【偏向・誤解の危険があるので】不可、また一人の教師は図書館学校での訓練を経っていないのは遺憾である。コロンビアン大学は、入学条件が不明瞭で、科目の一部だけとるのを許すのは不可。シラキューズ大学では、図書館学校での訓練も受けていず、他の図書館の経験もないものを教員に採用している。」<sup>21)</sup> と約言している。批判を受けなかった即ち1903年の報告では公認せられたとみなされる他の6校はいずれもその委員会にメンバーを送っていた学校であることは面白い事実で、公認審査の問題にもからんで反省材料ともなることである。

1906年の報告では、どんな科目が教えられるべきかについて、述べられている。<sup>22)</sup>

- 分類 十進分類法 (デューイ)
- 展開分類法 (カッター)
- 目録 分類目録
- 辞書体目録
- 経営 受入業務
- 書架目録作業



貸出法  
製本と修理製本  
用品並びに統計  
注文作業  
参考業務 講義と問題  
書誌  
図書選択

この報告に対し、図書館弘報委員会 (Committee on Publicity) から「館の活動を新聞・雑誌に載せるための資料作成」という科目を追加すべきであるとの提案も出されたが、それは時期尚早とみられ、採択にいたらなかった。この弘報委員会は、Dana, Ranck, Wright 等の進歩派からなっており、あらゆる機会を通じて、その重要性の認識を広めようとして活発な動きをみせたが、ある場合の照会状の際には、232 通の中、僅か79 通しか回収出来なかったこともあったと言われている。

1906年の報告では上記の内容の他に、教授陣、教授法に対する条件も規定しているが、それによると、教員の3分の1は図書館学校卒業者であること、3分の1は他の図書館での勤務経験者たること、何人かは現に実務を行っているものを加えることになっている。また演習では学生10人につき1人の教師を配当すること、全時間の6分の1以上は監督つきでの図書館実務(実習)にあてることがきめられていた。

1903年の委員会のメンバーは此の報告には不満で、その提出を中止更に慎重討議を続行することを勧告したにもかかわらず、この報告の内容が、アメリカ図書館協会で、最初の図書館学審査基準として認められるに至ったのである。委員会は「理想的な姿の基準を作るという意味ではなく、現状を正視し、最低これだけは具備しなければならない、という意味での基準である。」<sup>23)</sup>とことわっている。

こうして審査基準が出来ると、それを守っていき、更に館界・教育界の進歩に歩調をあわせて育てていくための審査機関が作られたのは当然のことであるが、それについては、ここには触れない。<sup>24)</sup>ただその当時までのことが日本の図書館界にはどう受けとられていたかについて述べておきたい。

湯浅吉郎氏(京都府立図書館長)は「図書館員養成の必要」<sup>25)</sup>と題して次の様に述べている。

従来の図書館員養成法とも云うべきものを見る

に、期約徒弟的、年期奉公的にて、云はば丁稚的の方法にて、自然に任せておくと云う至極呑気な遣口にて...

氏は更に米国にての認識の実状を次のように紹介しておられる。

弊害三ヶ条を指摘した人あり

- 第1 経験のみを以て館員を養成するときは、各国図書館の統一を欠き、管理上不調和を生ず。
- 第2 経験のみによるを以て、最も不都合なるものを最も都合よきことと思居ることなきにしもあらず。
- 第3 学理を知りて経験を欠くものは、その経験を得るに時を要すること少し。学理を知らずして単に経験のみによるときは、年月を要し、経費を要すること多し。

#### D. ウィリアムソンとコロンビア大学図書館学校

Charles Clarence Williamson は1921年と1923年とにそれぞれ *Training for Library Work* を書き、*Training for Library Service* を発表しているが、前者の p. 84 と後者の p. 59 で次のように言っている。

学生の一般的能力のテストとする意味で、長期にわたる実務経験をさせるのは不要である。教師は教室での練習、所謂教室実務を行うことによって、その学生の能力を見抜くことが出来る筈である。もしこのような際にそれが出来なければ、所謂実際の作業によっても学生の能力を見ぬくということは困難なことであろう。

更にまたウィリアムソンは次のように言っている。

もしも、専門職図書館学校の全てが大学院課程にもっていかれた場合には、その時の第1年の課程は、バランスのとれた、完全な一般の科目として編成されるべきである。それらの科目を履修したものは第2年目の特殊科目を受けることが期待される。その際には、各人がそれぞれ欲するところの「公認」学校に進めるようにすべきである。例えば、児童図書館を志すものは、Western Reserve 大学に、特別の実業図書館コースは New York Public Library に、立法レファレン

## 資料組織教授法の変遷

ンスなら Wisconsin 大学、郡立図書館コースなら、加州大学といった具合にである。<sup>26)</sup>

このウィリアムソンが校長となりその教科カリキュラムを発展させていったコロンビア大学の図書館学校では資料組織の科目をどう扱っていたかを見よう。ウィリアムソン就任後10年目の1935/36の要綱から紹介すると次のようである。

### 目録と件名標目附与 4 ポイント (初級免許用)

辞書体目録を作るに際し基礎となる原理全般を解説。件名作業に必要な手順を履修。講義と練習問題。個人著作・団体著作・政府刊行物・逐次刊行物・議会図書館印刷カード注文体等についても触れる。練習問題は特定の規則、即ち ALA 規則、Sears 件名標目表などを用いて課するが、なるべく他の規則類とも比較して論ずる。

### 分類 2 ポイント (初級免許用)

図書館分類の原則を実情にあわせて学ぶ。デューイ十進分類を用いる際に生ずる問題を課す。分類の歴史、十進分類以外の特に議会図書館分類などの体系にも触れる。それぞれの分類が、特定の図書館機能において、また主題分野に従って、どのように活用されていくかを説明する。

### 図書と索引誌 2 ポイント (初級免許用、選択)

一定の基準に従って索引を調製してゆくことの必要性を認識させる。市販の印刷された索引類を分析して討議する。どんな標目や副標目をとり、どういう風にあつめてゆくかにとどまらず、活字の問題、校正などもやってみる。但し知的の面、即ち著者が何を言わんとしているかを早く正確に呑みこみ、明かに表現する方法にも重点をおく。

### 辞書体目録の原理 2 ポイント

ALA 規則に基いて、重要な原理を説明した上で、100-150 冊を完全に目録にとらせてみる。精密な作業に慣れさせる。ABC 順排列だとか、議会図書館印刷カードについてよく知り、主要な目録用参考図書にあたらせる。

### 辞書体目録の原理(続) 2 ポイント

比較的困難な特殊タイプの目録の研究に主眼をおく。あまり精密なことまでやる必要はない。定期刊行物目録・政府刊行物その他の団体出版物の目録などの特徴をつかませる。

分類の原理 一般図書館における図書分類の方法と原理の学習。十進分類法の使い方を中心に図書記号のこと、その利害得失などを列挙調査する。米議会図書館分類法を概説した後十進分類との違いを検討する。

### 目録作業上の実際問題 2 ポイント (選択)

辞書体目録の原理で知った諸問題点を更に掘り下げていく。特別に困難な型の資料で、辞書体目録の原理(続)でとりあげなかったものの扱いを論ずる。この講義では実習の時間は配当しないが、宿題として目録作業を課す。

### 高等目録法 3 ポイント 修士用

規則やそれを適用していく技術についてというよりも、より広範の見地からみでの問題を論ずる。例えば各館種別によってそれぞれ適用の方針が、また方法が違ってくる点などを考察していく。

目録司書が用いる書誌・参考図書、目録部門の管理を扱う。協会・研究所発行の逐次刊行物、公文書、アメリカ資料、郷土資料等をどう扱うか、稀書・写本類の目録法について論ずる。また中世の作家名、宗教団体における改称名などに関する問題を論じたりする。

### 比較分類法 1 ポイント 修士用

十進分類と議会図書館分類を主として比較し、分類表における諸種の欠点から生ずる問題点を論じ、分類の限界を考察していく。

参考までにつけ加えておくと、この年にコロンビア大学図書館学校は190名(免許のみ10, 学士165, 修士15)を送り出している。

## III. 資料組織教授法の変遷

### A. ある図書館学校での例

次に、アメリカの図書館学校としては4番目のものとして1893年に創立された、アーマー工科大学(現在のイリノイ大学図書館学校)について、そこでの目録・分類の授業が、どのように取扱われてきたかを Kathryn Luther の報告<sup>27)</sup>を基に回顧してみることにする。

紙面を節約するために編年史的の記録で紹介しておく。

1893 シカゴ市 Armour Institute of Technology 時代 [当時はこの図書館では分類目録が使われていた] デューイの *Library School Rules* カッターの

- Rules for a dictionary catalog*, ALA の *List of subject headings* などが教材に用いられていたと Margaret Mann<sup>28)</sup> は述べている。
- 1894 比較分類法 (Perkins, Cutter, Schwartz, Fletcher, Dewey, Rowell 等)
- 1897 University of Illinois に School of Library Economy 開設。ここでは初等図書館学 (Elementary Library Economy) 高等図書館学 (Advanced Library Economy) があり、初等の方では目録も分類も同時平行に取扱われ、館種が異った場合どう変化があるかなども、カード目録を実例に示しながら教えていった。高等の方では分類表の比較、目録規則の比較研究などを行った。
- 1910 大学の *Bulletin* (April 25, 1910) によると分類と目録が分割されている。分類は主として十進分類法を中心に行われた。その他としては、カッターの展開分類法について4時間、著者記号法を4時間程度説明している。目録では辞書体編成を目標に作業を行った。この年は件名附与作業は「目録」の時間に扱われた。各学生は代表的な図書340について目録をとった。なお他に「分類と目録(高等)」という講義もあったが、それは重要ないくつかの分類表、目録規則を比較研究することに使われた。
- 1911 この年には「分類」の授業に、件名附与の作業を含ませるように変更がなされた (大学の *Bulletin* Feb. 20, 1911 による)。
- 1916 「分類と目録(高等)」のコース名が「比較分類・目録法」と改称された。
- 1925/26 「目録」のコースの方で件名附与作業を取り扱うようになった。「比較分類・目録法」はまた「分類と目録(高等)」となった。即ち1910年の状態にもどったわけである。
- 1931/32 件名附与作業は「分類」にもどし、「分類と目録(高等)」では「目録作業における書誌的・研究上の諸問題」ともいうべき内容がつけ加えられることになった。
- 1935/36 「分類」のコースで、簡単ではあるが議会図書館分類表を説明することになった。上級の科目も「高等目録法——図書目録規則の比較；書誌的・研究上の諸問題」と「高等分類法——件名標目体系と分類の比較、議会図書館の体系を主に」の二つにわけた。
- 1937/38 「目録」の授業では L.C. の実際を例に辞書体目録作成を研究し、後期ではクラスを二つに分けて、大学図書館向きと公共図書館向き (高校図書館を含む) の問題を論じた。
- 1944 全学生必修の科目として、目録と分類を統合したものにした。(大学 *Bulletin*, Feb. 1, 1944, vol. 41, no. 24, p. 13) 二学期になって選択出来る科目は、「目録・分類上の諸問題」は前学期における授業の引き続きではあるが、特別なタイプの資料の目録・分類を主とし、また目録部門の管理上の問題点を扱っている。地図・楽譜・論文・逐刊物・続きものその他で特別の記述の注記、分析、標目の選択に問題のあるようなものを含ませている。カード編成、分類の使用なども加えられた。
- 更にまた大学院課程の科目としては「上級分類法」として分類の歴史・理論、分類体系の比較研究、件名標目の批判、特殊タイプ資料の分類・管理上の問題を論じている。「上級目録法」では目録の歴史・理論、目録規則、編成規則の比較研究、インキュナブラ、稀書稿本、古文書等の目録、目録上の管理的の問題を論じている。
- 現在の同図書館学校における科目はどうなっているかを 1962-1964 の要綱から紹介しておこう。
- 図書館資料の組織 (L. S. 255)
- これは教育学部の学生が副専攻として図書館学を選ぶ場合にとる科目で、学習指導では第3学年または第4学年の時にとるようにすすめている。
- 現代図書館における目録並びに分類の入門ともいふべきコース。週3時間。
- 目録・分類法 I (L. S. 407)
- 大学院での科目。目録・分類の原則の理論・実際並びにその応用。
- 主題目録法と複雑なタイプの目録記入に重点をおく。十進分類法、議会図書館の分類法や件名標目に慣れるような問題をだす。Eaton 教授担当。1単位 (毎週4時間に相当する)
- 目録・分類法 II (L. S. 408)
- 特殊なタイプの資料の目録・分類、地図、楽譜、フィルム、スライド、音盤、インキュナブラその他稀書などの目録・分類をとりあげる。目録部門での管理上の問題点にも論及する。前項の407をすませた人でなければ受けられない。Eaton 教授担当。1単位。

## 資料組織教授法の変遷

### 図書館目録の発展 (L.S. 436)

分類法、目録規則の哲学[理論]と歴史並びに現代の目録作業の比較調査。前項の408をすませた人でなければ受けられない。Eaton 教授担当。1単位。

### 記述(解説)書誌 (L.S. 461)

記述(解説)書誌 (Descriptive bibliography) とその方法。Bradshaw や Proctor の時代から Greg や Bowers 迄の理想や目標について論ずる。従ってこれは記述目録法の科目ではない。[が高級の目録係たるものは承知しておいて欲しい科目である。] Eaton 教授担当。1単位。

### 技術的奉仕の最近の発展 (L.S. 463)

目録、分類並びに関連分野の管理に於ける、方針や方法の変化を精査してゆく。Eaton 教授担当。1単位。

Thelma Eaton 女史はミシガン大学で修士、シカゴ大学図書館学校で博士学位をとった生粋の図書館人で、ニューヨーク公共図書館その他で参考係司書をつとめ、1947年以降は諸図書館学校を歴任、1949年からはイリノイ大学図書館学校において、目録・分類を担当している人である。

彼女が長年、講義用のテキストとして用いているものは、邦訳もされており、<sup>29)</sup> また Dewey 十進分類法の第15版が出現した当時の彼女の批判は有名であるので、彼女の立場を知る人は多い。また日本にも彼女の講義を受けた図書館人がすくなくない。

### B. その他の図書館学校の現状

イリノイ大学図書館学校以外では、資料組織をどのように取扱っているかについてみよう。紙面に限りがあるので、極く少数の代表的サンプルについて、最近の学校案内から要約紹介しておく。

University of Pittsburgh. Graduate School of Library and Information Sciences. これは1962年7月から設立された学校であるが、その前身ともいべき Carnegie Library School は1901年以來の伝統をもつ、また1903年の報告にもあげられている学校である。新しく生れた学校は、校長にイリノイの図書館学校副校長であった Harold Lancour をむかえ、博士課程に重きをおくという方針を打ちだし、図書館学教育界に話題と刺激を与えた。

修士課程、博士課程の他に、両者の中間ともいべき「図書館・情報科学高級免許」を与える課程を発表して

いるが、それらの為に用意されている科目は、次の4つの科目群にわたっている。

1. 基礎と研究
2. 資料
3. 技術的作業とその方式
4. 経営と特別奉仕

この技術的作業とその方式の中から、既に論じてきた科目とならべ得るものを取り出してみると次の通りである。

### 図書館資料の組織 (L.S., 150)

主として図書に重点をおくが、図書館資料の記述目録作業と主題目録作業の理論と実際を述べる。

4単位

### 技術的工工程 (L.S., 252)

前記に続くもので、前記を終了したもののみを受講させる。特に議会図書館分類について述べ、また受入れの手順、貸出し法、写真複写奉仕などの技術的工工程をも論ずる。

3単位

### 目録・分類法上の特殊な問題 (L.S., 253)

地図・地図帖、マイクロコピー、稀書、写本、楽譜・音盤類の他、受入れたときの指示そのままで整理しておけばよいようなコレクションなどの取扱いなどについても論ずる。

3単位

### 稀書 (L.S., 255) [後出シカゴ338参照]

3単位

### 書誌的記述の方法と理論 (L.S., 256)

3単位

### 技術的奉仕セミナー (L.S., 350)

いくつかの情報検索方式における各段階の操作・過程の調査研究(各人が実施する)その方法、問題点、進行などをセミナーの時間で報告しあい、共通点その他を討議しあう。

3単位

以上の他には、機械検索、データ処理、言語の問題関係で6科目18単位がある。他の科目群についていえば、1は11科目30-32単位、2は15科目42単位、4は11科目32-44単位といった配分である。

### The University of Chicago. The Graduate Library School (1963・1964)

この学校は種々と批判も受けてはいるが最も学問的なアプローチを狙っているものとされている。ここでの修士課程(A.M.)の目標は、一般教育の3系列の科目と図書館学以外の主題専門を持つことに加え、更に三つの目

標を持っている。

イ. 図書館における基本。図書館が社会的機関として果す役割や目的の理解。図書館資料を説明・評価・組織・利用に慣熟すること。読書やその他の意図伝達の際の諸問題の理解。

ロ. 図書館における基本的操作を実行してゆく能力

ハ. 図書館の特別の分野の一または二について相当高度な学習をすること。例えば公共図書館、学術(大学)図書館、専門図書館、児童に対する奉仕と学校図書館、図書・図書館史(学問の歴史も含む)、資料組織、読書と伝達手段等に限定してのそれぞれの知識・技術を身につけてゆくこと。

博士号はただ特定の数の科目を終了したとか、年限を在籍してすごしたということに対して与えられるものでないことは当然であるが、修士課程を終了し、自分で選んだ分野において、学問上優れた寄与であることを認められる論文の提出を待って与えられる。<sup>30)</sup>

上記のプログラムの為に用意されている科目は次の如きものである。

特別な図書館資料を目録・分類する際の問題点 (372)

地図、マイクロフィルム、楽譜、音盤やテープ、公文書類、絵画・写真その他の特殊資料群を目録・分類していく際に生ずる個々の問題を論ずる。Strout 準教授担当

目録の理論と歴史(セミナー) (472)

図書館の目録と目録規則の理論と歴史を広い見地から論じていく。Strout 準教授担当

分類の理論と歴史(セミナー) (476)

知識分類が図書館にどう応用されているかについての理論的考察。古代から現代迄の重要な分類体系の精査と批判、特に図書の分類、主題目録に及ぼした影響について論ずる。

以上では非常に変化が少いように思われるかもしれないが、本誌前号<sup>31)</sup>にも紹介されたので周知のことであるが、総合された講座があることを忘れてはならない。

図書館資料の解釈・評価・利用 (301-304)

学生が重要な諸分野に於ける図書を正当に解釈・評価出来るようにするために、それらが如何にして著作・編さんされ、組織されたコレクションとして利用者に使われてゆくかの基本的問題を取りあげて

いく。即ち従来の科目構成からいうと、図書選択、資料組織、参考・閲覧奉仕を総合して取扱い、主題別で分割してある科目である。このうち一般と人文科学は Strout 準教授が担当しており、社会科学は Weintraub 専任講師、自然科学は Henkle 講師が担当している。

稀書図書館学 (338)

稀書のコレクションがどのような特徴を持ち、学術界に寄与しているかを論ずるこの科目は、管理上の問題を多分に含んでいるが、目録を通して解釈することが多いので、技術関係の科目ともみなすことが出来よう。Winger 準教授担当

Columbia University. School of Library Service.

1962-1963

デューイによって最初の図書館学校として設立され、ウィリアムソンにより再発足したこの図書館学校は、教員数(含兼任者)、学生数、コースの規模からいって最大の図書館学校といえよう。各コースにつけられる番号は4桁が使用されていて、その配当区別は次のようになっている。

6001—6999

修士学位のための基本コース

8001—8999

修士課程、博士課程両方のために開設

9001—9999

セミナー、博士学位のためのコース

但し講師が許可した場合には修士課程の学生もとり得る。

図書館における技術的奉仕 (L. S., 6031)

図書館で行なわれる実務やその別法を客観的に理解する為に、受入・目録・保管・貸出の諸方法を調査する。 3 ポイント

図書館資料の組織 (L. S., 6041)

前記をすましたものが受講。図書館資料の組織には、目録の原則・主題分析・分類その他の書誌の方法を含む。 3 ポイント

技術的奉仕での最近の問題 (L. S., 8031)

前記両科目をすませたものが受講。図書館蔵書の成長・組織・格納・維持・保存、ドキュメンテーション、技術的奉仕作業の管理。この分野での研究の解析。 3 ポイント

資料組織セミナー (L. S., 9031-9032)

## 資料組織教授法の変遷

資料を収集・組織・記録し利用に供する際の諸問題。目録規則、分類体系、書誌調整を論ずる。

3 ポイント

他に特別コースとして

科学・技術文献の抄録・索引法 (L. S., 6321)

各種の科学・技術文献抄録を検討し、特殊な用途にいかなるタイプの抄録が役立つかを論ずる。各分野の専門家をして用語の解説をさせたり、抄録作業並びに抄録の索引を作成するにあたり生ずる問題を討議したりする。

3 ポイント

これらの内容は、1957/58 の番号3桁時代(筆者のコロンビア訪問時代)のそれと大差なく、また1935/36 の要綱からみられる当時の内容とも本質的の変化はない。ただ他の科目が増加してきているので、全体としてみた場合技術的科目の相対的比重は若干影響されていると言えるかもしれない。図書館学校の入学資格を全体的に高くしたことから、技術的科目を最少限にとどめる、ということは当然予想されることであるが、ここに一番最初にあげた科目(L. S., 6031 と 6041)は「これより下まわること、図書館業務全般に見通しをつけ、理解するのに支障を来す。」という最低限である。修士課程の基本コースという11科目の中に算えられているのは勿論、コアとして館種の如何を問わず誰もがとらねばならない7科目の中にもあげられている。参考のために述べておくが、修士課程で専門科目として要求されているのは36ポイントである。

### むすび

以上、貴重な紙面を汚して、長々と過去の事実を紹介しようとしてつめてきた。対象としたものは、アメリカという一国における正式の教育機関における館員訓練の実状である。<sup>32)</sup> しかも筆者の能力・時間で制限されたこの調査の中からも、現在の日本の図書館学教育関係者に示唆を与えてくれるものがすくなくない。

イリノイ大学で、この科目の内容についてこのような変更が度々なされた、ということは決して単純な理由からではない。担当者として人が得られなかった場合、教授の信条なども影響したかもしれない。しかし変遷のあとをたどってみて、一番強く感銘させられる点は「外部即ち図書館界の要求に沿わせる」ということが旗印になっており、しかも其の間に「未知の世界への開発」を頭に画いている図書館人よっての飛躍がとげられてきた

ということである。専門職の確立を信じて、現状の客観的分析を行い、現在行われている方法の反省を忘れないでいる人達が常にいたという事実である。

その際問題になることは、図書館(それは資料館、情報センターなど、どんな名称で呼ばれようと問わない)の活動範囲の拡大とそれに伴う業務の分担ということである。専門職の確立を目指す以上、非専門職との区別をしてゆかねばならぬことは明かである。その区別は人についてすると、個々の業務についてすると二つの近接法がある。そしてこれについてはいくつかの議論が出されているが、ここでは触れない。本論に関連しては、図書館側が「目録・分類者というものに対して、何を期待しているか?」というその内容に変化がみられつつあるということを指摘しておこう。

閲覧者、即ち図書館利用者とは直接に接触することなしに、ただ、資料だけにあたり、その内容を類推して主題分析を行い、またその資料のいわゆる「必要とされる限りの」全貌を国際規格(7.5 cm×12.5 cm)のカードに代表させようとする試みが如何に困難であり、ある場合には徒勞に終るのだということを認識した人々から提案、実施された Dual assignment<sup>33)34)</sup>(多人数で運営されている図書館にあっても、目録・分類作業も対利用者奉仕も両方をさせる方式。実際は同一人に対し、午前・午後とか曜日によって両方の業務をそれぞれ受け持たせるようにする。)の例をみるとよくわかる。また、目録・分類作業を遂行するに必要な、非常に時間もかかり、面倒で困難な予備作業も含めて、そのようなことをなるべく一個所だけですますようにという狙いから提案されている Cataloging-in-source<sup>35)</sup>の例も一つの傾向である。

シカゴ大学で実施しだした、総合されたコースも一つの解決である。これは Dr. Shera がシカゴ大学在任当時に、更にまた Western Reserve 大学に転出後も実験的に、技術奉仕を利用奉仕に結びつけようと努めていたことの実践とみなすことが出来る。

人は異り、大学は異っても、それが行なわれた条件と経過が客観的に記録されている限り、それまでの成果をふまえての次の実験、あるいはまた実用試験が行なわれるのである。

国が異なる場合も同じことが言い得ると思う。ただその際に気をつけなければならないことは、経済学者がよく用いる、所謂 *ceteris paribus* 「他の事情相同じとすれば」の条件の吟味を慎重にという点である。はじめに筆者が

紹介した、一ベテラン図書館人の批評「図書館技術面に重点がおかれ…」という言葉は、40単位中の8を指して言っているのか、それとも技術面講義担当者の態度に向けられた言葉であるのかを、批評者もまた、原案作成の小委員会も反省してみる必要がある。

- 1) Karstedt, Peter. *Studien zur Soziologie der Bibliothek*. Wiesbaden, Harrassowitz, 1954. 97 p.
- 2) これを裏書きしてくれる事実はいくつかある。1900年の Aksel G. S. Josephson 提案の書誌・図書館学校での「下級司書と上級司書」1917年の同氏の改訂提案「学士司書と修士司書」また一般には、1923年 Williamson 報告の以前と以後の傾向からも明らかである。
- 3) Institute on Library Education in the Southeast held at the University of Tennessee, Oct. 12-14, 1961. Course outlines for use in undergraduate programs in six areas of the library science curriculum. 15 p. mim.
- 4) 小倉親雄, “図書館学教育の諸類型,” 京都大学教育学部紀要, 6号, 1960. 12, p. 176.
- 5) Berelson, Bernard. *Education for librarianship*; papers presented at the library conference, University of Chicago, August 16-21, 1948. Chicago, A. L. A., 1949. p. 208-9.
- 6) Munn, Ralf. *Conditions and trends in education for librarianship*. New York, Carnegie Corporation, 1936. 49 p.
- 7) Carnovsky, Leon. “Why graduate study in librarianship?” *Library quarterly*, vol. 7, April 1937, p. 246-61.
- 8) *Ibid.*, p. 249-50.
- 9) *Ibid.*, p. 251.
- 10) Trautman, Ray. *A history of the School of Library Service, Columbia University*. New York, Columbia University Press, 1954. p. 12, 16, 19.
- 11) Rider, Fremont. *Melvil Dewey*. Chicago, A.L.A., 1944. p. 44.
- 12) Trautman, *op. cit.*, p. 14.
- 13) *Ibid.*, p. 17.
- 14) Vann, Sarah K. *Training for librarianship before 1923*. Chicago, A. L. A., 1961. 242 p.
- 15) *Ibid.*, p. 94.
- 16) *Ibid.*, p. 100.
- 17) これに関しては W.E. Henry, “Librarianship as a profession,” *Library journal*, vol. 42, May 1917, p. 350-5. がその見解を示しているという。
- 18) Vann, *op. cit.*, p. 109. 最後にある Columbian University とは 1897年に首都ワシントンに設立された図書館学校であって、ニューヨークのロンビアとは関係ない。ワシントン地区の政府機関の図書館人が主となって教員組織がつくられた夜間コースで、技術教育を2年間で完了すれば免許が得られるようになっていた。議会図書館長であった Spofford なども発起メンバーの一人であったが、1904年に「書誌学、図書館学の大学院課程を設立」という計画を発表するまでに発展したにもかかわらず、中断された。図書館学校の教員組織は「専任か? 兼任者でもよいか?」の問題の論議の際に、後日にもよく引用される例となった。
- 19) *Ibid.*, p. 110.
- 20) *Ibid.*, p. 156. 実習作業の配分については 1915年にも調査がなされた。その時の会合(1月)では、「図書館において実習として奉仕をすることは、学生が適性を有するか否かをみる最適のテストである。」といった点は一致した意見の如くに思われていたが、実際にそれをどの位、どんな風に評価するかについては一致点に到達していなかった。時間数だけについていえば、1年間履修の課程では120時間から464時間、2年間履修の課程では400時間から2559時間と開きが甚だしい。シカゴで開かれた Round Table of Library Schools の 1915年の議事詳録 p. 9. には、こんなに沢山の時間を費やしたのはどの学校であるかは記録されていないが、Vann 女史は、それが Carnegie Library of Pittsburgh と New York Public Library でないかと推察している。両校とも第2年度では学生を正規の助手として用い、給与を与えていたようである。
- 21) *Ibid.*, p. 110.
- 22) *Ibid.*, p. 134.
- 23) *Ibid.*, p. 136.
- 24) この点については、Robert L. Gitler, “Accreditation: agencies, practices, and procedures,” *Journal of education for librarianship*, vol. 1, no. 2, Fall 1960, p. 61-74. を参照されたい。
- 25) 湯浅吉郎, “図書館員養成の必要,” *図書館雑誌*, 1号, 1907. 10, p. 7-13.
- 26) Vann. *op. cit.*, p. 157.
- 27) University of Illinois. Library School. *Occasional papers*, no. 5, Dec. 1949, 12 p. 所載
- 28) Mann, Margaret. *A history of the Armour Institute Library School, 1893-1897. <Fifty years of education for librarianship: Papers presented for the celebration of the fiftieth anniversary of the University of Illinois Library School, March 2, 1943. Urbana, University of Illinois Press, 1943.>* p. 16.
- 29) Eaton, Thelma. *Cataloging and classification: an introductory manual*. Champaign, Illinois [c1951] 113 p. mim.  
— 洋書の整理, 目録, 分類, 件名作業の手引き. 今まで子訳. 東京, 日本図書館協会, 1964. 172 p.
- 30) シカゴ大学ではこのプログラム以外に4年制大学を完了していない学生に対しても勉学の便を与え

## 資料組織教授法の変遷

ている。また専門図書館用教育プログラムは、それぞれ次の学部、学科と共同して履修計画を作り、修士学位を与えている。

音楽学科

芸術学科

大学院ビジネス研究科

大学院神学研究科

さらに、大学院教育学研究科との共同で、人数は制限されるが、学校司書養成のプログラムを持っている。

- 31) Strout, Ruth French. "On the teaching of cataloging," *Library science*, no. 2, 1964, p. 51-63.
- 32) U. S. Department of Health, Education and Welfare. *Library education directory*. 1962/63 によると図書館学コースを持つ 277 の大学があり、その中で、アメリカ図書館協会が公認している大学院課程を持つものについてだけ算えあげても 42 校ある。僅かに本文に挙げた 4 校のみについて、資料組織の科目の取り扱いを紹介して一つの方向を求めようとするのは無理と言われるかもしれない。この外にも、最多数の専任教員を持つといわれる、ラトガース大学、ウェスタン・リザーブ大学の両大学、その他の意味でそれぞれ特色を持つといわれている、UCLA (羅府加州大学)、ミシガン大学、シモンズ大学、ジョージ・ビーボディー大学 (特にその夏季プログラムは有名) での実状を紹介すべきであったかもしれない。それからまた、アメリカ以外の国々も何らかの意味で、日本の図書館学教育に参考になると思われるものを持ってい

る。科学研究費交付金 (総合研究) を得て、日本図書館学会の有志が開始した「各国における図書館学教育の比較研究」で収集した資料だけからみても、中華民国、印度、カナダ、コロンビア、フランス、英国、ドイツ、ソ連の実状を知ることが必要なことがわかる。最後にあげた三ヶ国については、資料組織と限定してではないが、いくつかの紹介はなされている。それからまた日本に於ける教育・訓練の変遷を回顧する必要があるのは言うまでもないことである。戦後 20 年だけに限定しても、激動期といった意味で参考になるデータも多いが、筆者は、大正 7 年 (和田万吉氏が東京帝国大学国文科で「図書館管理要項」を開講した) 更には明治 36 年迄遡って、図書館事項講習会の頃あたりから調査をしてみる必要があると思っている。

- 33) Lundy, F. A., et al. "The dual assignment: Cataloging and reference. A four-year review of cataloging in the divisional plans," *Library resources and technical services*, vol. 3, Summer 1959, p. 167-88.
- 34) Miller, Enid. "Public service and cataloging at the University of Nebraska," *Library resources and technical services*, vol. 3, Summer 1959, p. 188-91.
- 35) Spalding, C. Sumner. "Cataloging in source: The experiment from the viewpoint of the Library of Congress," *Library resources and technical services*, vol. 3, Fall 1959, p. 239-47.